

12歳 奇兵隊に参加
20歳 工学寮の官費生に
26歳 工部省に入省
55歳 後に迎賓館赤坂離宮となる
東宮御所が完成

vol. 23

片山 東熊

▶▶ Katayama Toukuma

日本近代建築の 一翼を担った宮廷建築家

わが国への国賓や公賓をもてなす外交活動の舞台である迎賓館赤坂離宮。壮麗な正門の前に立っただけで、まるでフランスの宮殿に来たかのような錯覚を覚える。日本の木造建築とは異なり、石造りで左右対称を美しさの基本とする西洋建築でありながら、どこか日本らしさを感じさせる。同様の趣向は、東京国立博物館表慶館、京都国立博物館、奈良国立博物館にも感じられる。これらを設計したのが片山東熊である。

▶▶▶ わんぱくだった少年時代

アメリカのペリー提督が浦賀に来航した1853年（嘉永6年）、東熊は現在の山口県にあたる長州藩の下級武士の家に生まれた。男兄弟4人の末っ子で、体格が良く、子どもの頃はわんぱくだったという。

日本という国が大きな転換点を迎えていた時代、東熊が暮らす萩は美しい街並みの城下町であると同時に、幕末の志士たちが駆ける長州藩の本拠地だった。身分にとらわれず有志を募って結成された奇兵隊に、東熊も12歳で参加し、新政府軍と旧幕府軍との間で繰り広げられた戊辰戦争では戦地に赴いている。

▶▶▶ 新しい職業「建築家」への学び

江戸幕府にかわって誕生した明治政府は、官営事業を担う工部省を設置し、省内に技術者を育成する工学寮を設けた。20歳の東熊はこの工学寮を受験し、学費が免除される官費生として入学した。

工学寮は1877年（明治10年）の組織改編に伴って工部大学校となり、建築家を育てる造家学科が設けられた。新しい職業である建築家は建物や空間を設計・監理し、



1853年、現在の山口県萩市出身の建築家。皇室や華族に関連する建築物が多いが、栃木県庁や秋田県公会堂、神奈川県庁など公共施設の建築・設計にも関わっている。1917年逝去。

デザインや機能性、安全性なども含めて総合的に考える専門家だった。

造家学科で指導にあたったのは、お雇い外国人としてイギリスからやって来た建築家、ジョサイア・コンドルである。イギリスのコンペで優勝するほどのスキルやセンスをもつ彼の下、東熊は第一期生として知識と技術の習得に励んだ。コンドルの講義は体系的であった上、建築現場に学生たちも携わらせるなど実践的でもあった。東熊の同期で東京駅や日本銀行本店本館の設計で知られる辰野金吾をはじめ、コンドルの教え子たちは、卒業後、まだ黎明期だった日本近代建築の世界で目覚ましい活躍を見せている。

▶▶▶ ヨーロッパで宮殿を調査研究

東熊は26歳で卒業すると工部省に入省、国の建築物の設計・施工・維持管理を担う営繕課で経験を積み、腕を磨いた。33歳の時、工部省を辞し、宮内省へ入省すると皇室の建物の造営を担当する部署に配属され、宮殿装飾について調査研究するためヨーロッパを訪れた。当時の皇太子のご成婚に合わせ東宮御所を建設することが決まると、再び調査研究のためヨーロッパを訪れている。

1909年に完成した東宮御所は、第二次世界大戦後、国の所有となり国立国会図書館や裁判官弾劾裁判所として使われたこともあった。日本が国際社会へ復帰すると、外国からの賓客を迎える場の必要性が高まり、これを受け1974年、迎賓館赤坂離宮として開館した。東熊が64歳でこの世を去って57年後のことである。自ら設計した建物で、手本としたヨーロッパからも数多の賓客を迎えていることを知れば、東熊はどのように思うだろう。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）